

## 聖書の祈りが私の祈りになる（新約編）

### 第7章 キリストの生涯と働きにおける祈り⑦



#### ゲッセマネでの祈り



イエスは、捕らえられるに先立ち、弟子たちを伴ってゲッセマネに赴かれました。主にとってのこの圧倒的な苦痛の時に、ペテロ、ヤコブ、ヨハネという弟子たちの中でも主に近しかった人々は、悲惨なほどに主の期待に添うことができませんでした。事の重要性とイエスが直面しておられた大いなる試練の意味とが理解できていなかったばかりか、彼らはまた、自分たちを待ちかまえている試練に対しても自らを整えることができていなかったのです。

それから、イエスは少し進んで行って、ひれ伏して祈って言われた。「わが父よ。できますならば、この杯をわたしから過ぎ去らせてください。しかし、わたしの願うようにではなく、あなたのみこころのように、なさってください。」それから、イエスは弟子たちのところに戻って来て、彼らの眠っているのを見つけ、ペテロに言われた。「あなたがたは、そんなに、一時間でも、わたしと一っしょに目をさましていることができなかつたのか。誘惑に陥らないように、目をさまして、祈っていなさい。心は燃えていても、肉体は弱いのです。」イエスは二度目に離れて行き、祈って言われた。「わが父よ。どうしても飲まずには済まされぬ杯でしたら、どうぞみこころのとおりをなさってください。」イエスが戻って来て、ご覧になると、彼らはまたも眠っていた。目をあけていることができなかったのである。イエスは、またも彼らを置いて行かれ、もう一度同じことをくり返して三度目の祈りをされた。（マタイ 26:39-44）

祈りの場面としてこれほどのものは、歴史上でもこの時限りです。弟子たちの中でも最も献身的な者たちがそばにいたにもかかわらず、イエスは重荷を一人で父なる神のもとに携えていかねばなりませんでした。時は夜でした。空気はその後を予感し、重苦しいものとなっていました。マルコはイエスが「深く恐れもだえ始められた」（マルコ 14:33）と記録しています。イエスの言葉が続きます。「わたしは悲しみのあまり死ぬほどです」（34節）。「深く恐れ」「もだえ」「悲しみのあまり死ぬほど」---イエスにとってなんと恐ろしい時間であったことでしょうか。

「それ（ご自分のいのち）を捨てる権威……それをもう一度得る権威」（ヨハネ 10:18 括弧内著者）をお持ちの方が、なぜにそこまで著しく落胆してしまわれたのでしょうか。その恐ろしい夜に限って、なぜにそこまでの祈りをされなければならなかったのでしょうか。イエスご自身の言葉によれば、理由は「この杯」（マタイ 26:39、42、マルコ 14:36、ルカ 22:20、42）と呼ばれるものにありました。その杯がなぜにそこまで恐ろしいものであったのかについては、私たちは推測することしかできません。確かなことは、それは単にイエスの肉体的な死を予見するだけのものではなかったということです。仮にそれだけのものであったなら、弟子たちの多くはもっと大きな勇気を持って死に向き合っていたことでしょう。さらに言うならば、そもそもイエスはこの世に、死ぬために来られていたのです。

そこに強く暗示されているのは、その杯が罪に満ちたものであったということです。世の罪と罪悪感とに満ちていたのです。人類の恐ろしい罪のすべてが、その杯の中にはあったのです。そこに起ころうとしていたことは、レビ記の中に既に示されていたかのようです。

アロンは生きていたやぎの頭に両手を置き、イスラエル人のすべての咎(とが)と、すべてのそむきを、どんな罪であっても、これを全部それの上に告白し、これらをそのやぎの頭の上に置き、係りの者の手でこれを荒野に放つ。そのやぎは、彼らのすべての咎(とが)をその上に負って、不毛の地へ行く。彼はそのやぎを荒野に放つ。(レビ 16:21-22)

カルバリに直面した神の御子は、過去・現在・未来のすべての罪のための贖罪の山羊となられるという、言葉に表しようのない状況に直面しておられたのです。これについては、その成就に見られるイザヤの預言的な内省もあります。「しかし、主は、私たちのすべての咎を彼に負わせた」（イザヤ 53:6）。ならば、恐怖に満ちたこのような情景と苦悩に満ちた祈りのゆえに、救い主の毛穴からは血が流れ出るほどであった（ルカ 22:44）としても不思議はほとんどありません。

この歴史的な場面におけるイエスのその後の三つの祈りは、ほぼ同一のものとなっています。マタイ、マルコ、ルカの間に見られる類似性に注目してみましょう。

第一の祈り：「わが父よ。できますならば、この杯をわたしから過ぎ去らせてください。しかし、わたしの願うようにはなく、あなたのみこころのように、なさってください」（マタイ 26:39）。

「アバ、父よ。あなたにおできにならないことはありません。どうぞ、この杯をわたしから取りのけてください」（マルコ 14:36）。

「父よ。みこころならば、この杯をわたしから取りのけてください。しかし、わたしの願いではなく、みこころのとおりにしてください」（ルカ 22:42）。

第二の祈り：「イエスは二度目に離れて行き、祈って言われた。『わが父よ。どうしても飲まずには済まされぬ杯でしたら、どうぞみこころのとおりをなさってください』（マタイ 26:42）。

「イエスは再び離れて行き、前と同じことばで祈られた」（マルコ 14:39）。

第三の祈り：「イエスは、またも彼らを置いて行かれ、もう一度同じことをくり返して三度目の祈りをされた」（マタイ 26:44）。

イエスがここで見られるような形で、神に「わが父よ」(マタイ) ないし「アバ、父よ」(マルコ) と呼びかけておられるのは、この機会だけです。これは注目に値します。イエスが唯一の助けの源なる方に呼ばわっておられるところに、苦痛に満ちたその魂の訴えを感じざるを得ません。それでもイエスは、ご自分の願いを「できませぬならば」(マタイ 26:39) という言葉で限定しておられるのです。

神にはあらゆることがおできになる。しかし、人が救われるためには、その呪いの杯を取り去ることは可能ではなかった。……神は常に苦難の杯を取り去ってくださるわけではない。自らの益のためであれ、他者の益のためであれ、私たちには苦しみが求められることもあるのだ。私たちの苦しみが神の永遠の目的を運ぶものとなることもあるのだ。それでも私たちは、それが除去されることを求めて祈る。……私たちは主の祈りの一部のみならず すべてを祈らなければならない。……「我が願う如きならず、汝の願われる如きに」と祈らなければならないのである。

この前例の無いイエスの祈りから生まれてきたものは何でしょうか。ヘブル人への手紙の著者は語っています。「(キリストは) そしてその敬虔のゆえに聞き入れられました。キリストは御子であられるのに、お受けになった多くの苦しみによって従順を学び、完全な者とされ、彼に従うすべての人々に対して、とこしえの救いを与える者となり」(ヘブル 5:7-9 括弧内著者)。

ルカはこのできごとについて、さらに一つの側面を提供しています。「すると、御使いが天からイエスに現れて、イエスを力づけた」(ルカ 22:43)。杯が除去されることと神のみこころが成就することの両方が実現するということは不可能でしたが、神のみこころが成就するよう、杯が飲まれるための助けの道は備えられたのです。それは今日を生きる私たちにとっても、依然として変わることはないのです。